

高校同窓会の登山旅行

「石鎚山～四万十川～剣山」1日目 面河の宿

9月26日午後2時が集合時刻だったが、リーダーの私の遅刻で出発が15分程遅れてしまった。面目ない話だ。

この同窓会登山旅行も今回から運転手さん付きのマイクロバスで移動することになった。安全の面でも、一部の参加者に特別の負担をかけなくてすむようになった点でも、評価すべき改善点であった。その運転手さんは地元愛媛県で生まれ育った人で、話題豊富、まじめで親切そして柔軟、随分と無理を聞いてもらった。有難うございました。

写真右 **アキノキリンソウ**



写真上 **シコクフウロ** 下**オオレイジンソウ**



バスは久万高原町に入り、更に山の中を走りぬけて夕刻面河（おもご）溪谷の宿に着いた。当地でほとんど唯一と言っていい宿はかなり古びており、どこか落魄とした雰囲気漂わせている。

夕食には炊き込みご飯が出た。一口含んでごっちんと分かった。「ごっちん」とは、「炊きあがっていないご飯」を指す長崎の言葉だ。気圧の低い高山では沸点が100度に達しないので、ごっちんがよく出来るのだが、今夜のはどうした事だろう。

それとなく給仕にあたっている女性たちを見ると、いずれも「常勤」ではなさそう。久しぶりに22人もの客を迎えて臨時に集められた近在の人達なのだろう。

そうだとすると苦情を申し立てるのが気の毒に思えて、黙って芯のある飯粒を噛み砕きながら食べた。

しかし、すぐに皆が騒ぎ出し、ついには炊き直すことになった。最近では山小屋でも出くわさない珍騒動であった。

←写真は**ミソガワソウ**(シソ科イヌハッカ属)

色めく石鎚（いしづち）山にみんなで登る

9月27日早朝、バスで土小屋まで送ってもらい、16名の男女が石鎚山を目指した。残りの5名はバスで内子町の観光に。

石鎚山系は西日本の最高峰・石鎚山（1982m）を盟主に東西100キロに亘ってそびえ、西四国を南北に分けている。この日のコースはその主脈山稜に沿って東から西に向けて歩く道なのだ。

険阻な箇所には巧みに栈道や梯子がかけられ、全体として緩やかな傾斜を登っていく。沿道にはアキノキリンソウ、シコクフウロ、シコクブシ（トリカブトの仲間）、レイジンソウ（伶人草・トリカブト属）、ミソガワソウ、ハガクレツリフネ、シオガマガク、リンドウなど秋の花々が咲いていて楽しい。

途中で男性一人が脚に痙攣を起こしたが応急手当と仲間たちの援助で成就からの道との合流点まで歩いた。合流点からは急登の険しい道になり、見応えのある紅葉が霧のベールを伴ってひろがり、また石鎚名物の二の鎖、三の鎖の鎖場もある。男性数人が鎖に挑んだ。結局頂上を踏んだのは女性4名、男性12名（成就から登ってきて合流したS君も含む）の16名であった。全員が67～68才の高齢者である事から見て、立派な成果と言える。

土小屋の国民宿舎前で待ち受けていたバスに乗って、一路四万十へ。

四万十川は、時にゆったりと、時に岩を噛み白波を立てながら悠々と流れている。車はその川を縫うようにして下流に向かう。

照り映える緑を映して、きらめきつつ流れる川には勇氣・活力を与えられるが、残照の中で暮れなずむ四万十川の情景も、見る人をも溶かし込んでしまうような独特の情趣がある。

この日の宿は、その四万十の流れを見下ろす台地に立てられた瀟洒な旅荘。人気のホテル星羅四万十だ。すぐれたロケーションの上に食事が素晴らしく美味しいのだ。昨夜との落差の大きさに、思わず微苦笑がこぼれてしまう。



上 ハガクレツリフネ



上 ミヤマダイヤモンドソウ



上 シオガマガク

高校同窓生の登山旅行3日～4日目

9月28日は四万十川沿いに下り、高知を観光して四国剣山麓まで移動する日だ。

昼間、川はまた別の顔を見せた。兩岸を結ぶ沈下橋は車と人がひっきりなしに往来し、橋の上からは多くの魚と共に水中の仕掛けが見える。中州の茂みの陰から出てきた小さい川舟が魚を追って静かに溯る。人々の暮らしはこの川の豊かな恵みと深く結びついているのだろう。ホテルの食材も川の天然物が多かった。

川沿いの鰻料理店で食べた天然鰻の丼は旨かった。そしてここでも川えびのから揚げが出された。テナガエビだ。

長崎ではテナガエビの一種を「ラクマ」と呼び、捕えて食べていた。浦上川の汽水域では沢山捕れ、戦後の食糧難時には貴重な蛋白源だった。パソコンで検索すると宮崎や熊本では「ダクマ」又は「ダクマエビ」とよんで、やはり食べるそうだ。ダクマの意味は分からない。

この日泊った徳島祖谷の宿は平家落人の末裔だそう。「源氏の子孫とは今でもしっくりいかない」と語った女将の民謡は鍛えこんだ声でよく響いた。

9月29日、21人が100名山の一つ・剣山の山頂(1955m)を踏んだ。みんなの頑張りは讃えられて然るべきと思う。

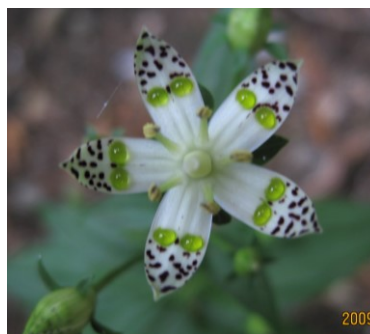
笹原の中の頂上からは、何処までも折り重なる山々と、そこに襍をなす深い谷々が、そして山肌にへばりつく人家の群とそれらを繋ぐ道路とが見えた。

平安時代の昔、戦乱を逃れてこの山奥に住み着いた人々と、追いかけてきた人達とが、共に過ごした長い歴史が刻まれた土地でもあるのだ。(以上104号)

写真下 沈下橋の見学



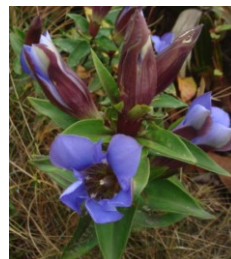
浜撫子 (桂浜)



2009 アケボノ草



シコクブシ



オヤマリンドウ

(トリカブトの一種)